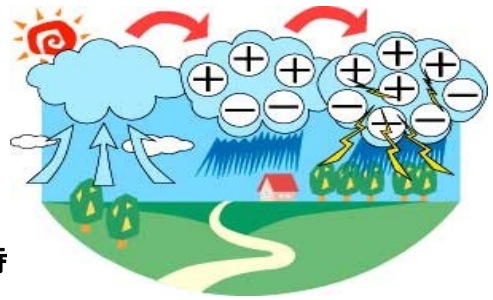


雷雲発生条件

雷雲は水蒸気をたっぷり含んだ空気が、マイナス20度の層（夏は上空7000m）を越えて上昇すると発生する。そのためには以下の2つの条件が必要。



条件1 大気が不安定

下層が暖かく湿った暖気があり、上層に乾いた寒気がある時

条件2 上昇気流が起こる

この大気が不安定なとき、暖かく湿った下層大気を上空に向けて押し出すきっかけの上昇気流があると、雷雲（積乱雲・入道雲）発生する。きっかけの上昇気流は、山にぶつかり山腹を駆け上がる風や、低気圧に伴う前線、海風と山風の衝突などである。

多くの落雷遭難事故では、雷鳴で初めて雷の発生に気がついています。雷鳴に気が付いて避難を始めた直ぐ後に雷に撃たれたり、避難中に雷雲に追いつかれて雷の集中砲火にさらされています。

雷鳴に気づいた時、あなたは、既に雷の射程範囲にいるのです。実は、雷鳴が聞こえる前から、もう、そこに落雷する危険があったのです。

1) 次の落雷は、前の位置から、0～30Km離れた場所で起こる。

最も頻度の高いのは3～4Km

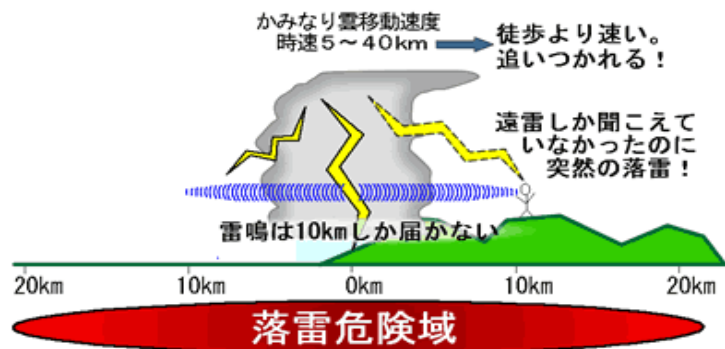
2) 次の落雷は0～10分後に起きる

最も頻度の高いのは15～16秒後

3) 雷に伴う降水

* 降水強度のピークは、落雷頻度のピークの5分後になる。

* 落雷数が多いほど、降水量は多い。



雷による人身被害

・落雷による日本での死傷者は、年平均14.1人(1995～2004年データ)

* 日本最悪の雷惨事 1967年西穂高岳落雷遭難事故(死者11人、負傷者14人)

* 北海道 大雪・烏帽子岳にて2005年5月登山者1名が落雷遭難事故発生。

雷から身を守る

* 予報・注意報に耳を傾ける

1) 天気予報で『大気が不安定』との言葉が出れば、雷が予想される。

2) 週・長期予報などで雷予報をチェックする。

3) 気象庁発表の雷注意報をチェックする。

登山中の雷被害を避ける

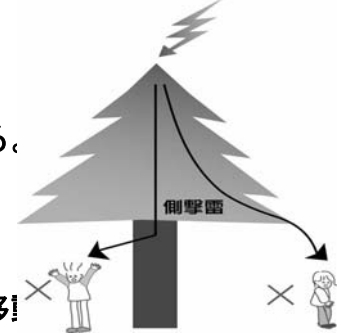
木のそばは**危険**です！
雷雨時には木から離れましょう

1) 山頂や稜線での雷に遭遇

一刻も早く、窪地や谷筋など安全な場所を見つけて避難する。
姿勢を低くして、雷の通り過ぎるのをじっと待つ

2) 広い草原や湿原での遭遇

上記と同じく最も危険な場所。姿勢を低くして待つ。
雷の合間をみて窪地や木の下など、少しでも安全な場所に移!

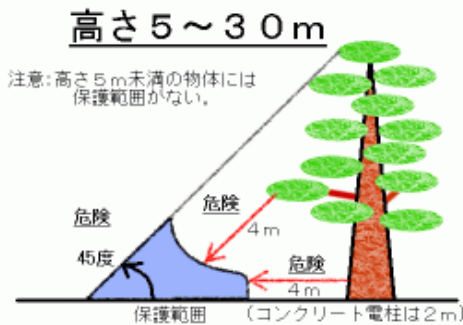


3) 樹林帯の中での遭遇

高い木に落雷しても側撃の可能性もあり危険。
出来るだけ高い木から離れて、窪地などで避難する。

4) 高い木の真下は危険

2m以上離れて、木の頂点を45度以上の角度で見上げる
範囲内で姿勢を低く保つ。どの葉先より2m以上の距離をとる。



5) テント内での遭遇

ポールに落雷の危険もあり、側撃事故も起こり易い。
外に飛び出して、テントポールを倒して本体を地面に横たえる。

6) 腕時計やイヤリングなど身につけている金属物は

人体そのものが身につけた金属より落雷し易い。時間に余裕があったら外す。
金属が致命的な体内電流を対外に引っ張り出して、助かる場合もある。

7) 背負ったザックはどうする

背負ったザックの上部が頭より上に出してしまうと危険。
ザックを抱えて避難するか、一時その場に置いて逃げる。

8) ストックやピッケルはどうする

手に持っても落雷の可能性が高くなることは無いが、
頭上高く振り上げない。傘は最も危険。



9) 避難するときの注意

避難する時は皆で固まらないで、間隔を開けること。
5m以上は間隔を空けて避難するのが安全である。

10) 午後は早めに行動を終えるのが第一

午後に雷が発生しやすい。気象情報や雲の動きを常にチェックして、早めに行動を終えて山小屋等の安全な場所に移動する。